

序

この小文は、留保つきながら藝術とも訳出しうるポイエーシスの現代的な意味について寄せられたある問いかけに對するささやかな回答でもある。

* * *

ポイエーシスの世界は、言うまでもなくその成立の根柢を歴史的世界にもっている。そのこの意味の根本は、そのテーマがいかなるものであれ、またたとえムーサの女神の恩寵を受けてそのポイエーマ（作品存在）が成立するという場合であれ、ポイエーテース（創り手）が紛れもなく歴史的・世界的存在者であるということである。このポイエーシスという歴史的営為を範疇論の用語法である基体と基体内在者との存在論的關係に組み込んで言えば、ポイエーマは、いわばそれ自体一つの歴史的・世界的な出来事としてのポイエーテースを場Ⅱ基体として可能的歴史世界として出来る。ポイエーシスの歴史の意味について考えるとき、その最も基本的なトポスはこのような存在論的・歴史的構造を自覚するエートス論である。

基体と基体内在者の關係の形式を存在論的エートス論に立つて一般的にミーメーシスあるいは例示の概念をもって語るとすると、ポイエーシスの領域においては、少なくとも以下の意味において二重の存在論的な例示ないしミーメーシスが成立する。すでに一個の歴史的・世界的存在者であるポイエーテースは、とりわけそのポイエーシスという際だった歴史的営為のかたちをもって、究極の基体としての世界のロゴス（！）に応答する世界例Ⅱ世界述語である。またポイエーマはそれ自体世界例として世界的なるものを例示するとともに、その直接的な基体存在であるポイエーテースをも例示するということである。

このような考え方に対しては、例えば、「悲劇はプラークシスと人生のミーメーシスである」と言われるとき、それ

はただ悲劇がそれぞれのポイエーマのかたちにおいて歴史世界の例示となることを意味しているだけである、との異論が提示されるかも知れない。しかしながら、このような言葉の背後には、それに相応しいエートスのみが卓越した悲劇を生み出すというより根本的な思想が控えている。その意味で、個々のポイエーマは、それを生み出したパトスそしてエートスがいかなるものであるかを暗示的にせよ確かに例示するのである。このポイエーマを広くロゴスやプラークシスを含むものとして考えれば、狭義のポイエーシスにおいては、存在論的エートス論的な二重の例示関係の典型が成立することになる。

ポイエーターズとポイエーマの関係について、今少し考えてみよう。例えば、出来事の展開 \equiv エートスの統一における詩的合理性や出来事をあやなす登場人物のそれぞれのエートスの統一性が要求されるとき、また一つの像の結晶においてはじめて美が語られるというとき、それはもはや一般的なポイエーターの問題領域を越えている。というのも、かかるものとしてのポイエーマの生起は、直接的な相似関係ではないけれども、人間のエートスをはじめとする事象一般の認識や思考の方式を内在させるポイエーターズ自身のエートスとその調和への基本的な志向を抜きにしては考えられないからである。ポイエーターズが「知恵の父」とか「指導的地位にある者」と呼ばれたことは周知のことであるが、それは決してポイエーマに現れる際だった行為のかたちや個々の知識そのもののゆえにはない。そのような呼称は何よりも、個々の知識や言葉をまさしく体系の知として生み出すことのできる、その知の体系性としてその基体としてのエートスの体系性そのものへの根本的な信頼に基づいている。それゆえにこそいわゆる詩人批判は、ただ単に国家における教育という観点のみならず、より根本的な存在論的エートス論という論点を有するのである。またそのように考えれば、あの著名な喜劇詩人がともすれば詩的語法の工夫に心を奪われがちな詩人たちを揶揄しつつ、アイスキュロスやフロネーシスの人として称える反面、ソフィストに交わってムーシケーを忘れ言葉の戯れに身を委ねるエウリピデスを非難するのは良く理解できる。あるいはまた、ソフィストのレートリケーがフィロソ

フイアーの名の下にあれほどにまで執拗に批判されたのは、そのテーマの扱い方や弱論強弁という言葉に代表されるような論理形式のためばかりではない。そもそもおよそロゴスに関わる者たちが、言葉や論理を弄んで、個々のテーマや語法あるいは論理そのものの基体であるそれぞれの世界内在的エートスのありかたへの根本的な反省を欠いているからである。

ポイエーシスの世界は原理的には可能的歴史世界であり、いかなる意味においてもわれわれが直接経験する歴史世界そのままではない。それは日常的世界では端的にそれとして認知することができない出来事のシュノプシスとその意味を与えるものとして、極度に抽象化された虚構の可能的歴史地平をもっている。この虚構の地平において、この世界に生起しうる可能的な出来事のシュノプシスとその歴史的意思を呈示することによって、ポイエーシスは究極の基体である世界そのものを例示する。

いわば虚構の地平に立つポイエーマがこの歴史世界における存在理由をもちうるのは、それがまさしく一個の確固たる世界例示として、他の世界存在者にその自己と世界についての認識を相対化させ、さらにはその相対化によって開かれた地平における総体化を模索させるという強力な歴史作用を有しうるからである。いわゆるカタルシスもまたかかる歴史作用の一つのかたちである。さらに言えば、ミーメシスとしてのポイエーシスをミーメシスするという意味での歴史作用があるからこそ、歴史世界を例示するものとしてのポイエーシスは国家教育の観点からあのように警戒されたのである。

かくして、ポイエーシスの歴史的意思は、ポイエーシスが何よりもその際だったかたちにおいて世界とエートスを例示し、その例示の力によって世界と自己についての認識の相対化 \parallel 総体化を促す、ということにある。

*

しかしながら、ポイエーシスはこのような意味を現代においてもなお保ちうるのか、の反論が提出されるかも知れ

ない。

上の命題が歴史の意味をもちうるためには、共属する世界内在者のエートスにおいて、歴史世界と人間的エートスの多様な例示を贈与する徳があり、そしてまたそれを歴史的に受容する徳があつて、そこに贈答のディアロガスが成立していなくてはならない。かかるディアロガスにおいてこそ相互作用は歴史的に力動的なものとなりうる。

しかし、共属感情、共属関係における相互作用的歴史意識、あるいはより総体的・本来的なものに向かう体系的認識衝動が事実上希薄になつた場合、上に述べたような極めて単純な存在論的世界例示構造における歴史的相互作用は成立しがたくなる。このような時代のエートスにおいては贈与する徳と受容する徳との協調は期待しにくい。現代はまさしく上になつたような歴史的ディアロガスを成立させる存在論的エーティケーを背景に退ける。その空き地にあらわれるのは、むしろモノローグを得手とする小さなデーミウルゴスたちである。

存在論的世界例示の構造やエーティケーが欠落するところでは、また存在論的体系的志向や目的論的意識が衰退するが、それはある時期においては体系の内閉じこめられていた個体的・部分的なるものの自立 \parallel 自律と活性化を助長するし、確実にそのような状況は存在してきた。この状況のなかでそれぞれのデーミウルゴスは、存在論や目的論をよそにひたすらそれぞれの論理でそれぞれのパースペクティヴを形相化し、ポイエーテース自身というよりは自由なポイエーテース自体を例示しつづけるという方法をとつてきた。

このようなポイエーテースの歴史の意味は、いわば自己例示としての自己目的運動によつて証明される歴史的営為の許容存在性そのものであり、その論理的帰結としての多元主義そのものである。したがつてかかる運動が他者一般との関係においてもつ意味は、もはや同一系列の贈答関係における歴史的・例示の意味ではなく、いわば共属の論理を拒否する異系列間の偶発的な接触における何らかの変異というに留まる。

ただここで留意すべきことは少なくとも二つある。その一つは、拡大再生産システムを確立した高度消費社会がか

かる自己目的的ポイエーシスの遊動を許容しそれなりにシステムに組み入れて一層活性化化したという事実である。それゆえこの生活環境が経済的変動に伴うリストラクチュアリングによって変更を余儀なくされるとき、かかる自己目的的遊動の運命がどうなるかという問題がある。もう一つは、目的論的体系からの解放はさまざまに自己活性化の運動を展開させたが、それはまた同時に意味一般を全体としては偶然性に曝しつづけることであつた。ここにおいて、この多元性と偶然性の展開に疲弊した結果として性急な一元化および必然化への傾斜が生じてくる。許容存在性についての意識の過剰が主観性を消耗させるという議論にも一理はあるが、問題は、多元主義の論理に代わる新たな相対的総体の論理が模索されその論理に拠つて自己を捉え直すまゝに、テーマとパトスのバランスを見極める余裕を持たず、また手段と目的を転倒させてあやしい矮小化された目的論が、社会正義を標榜して強権的に突出することである。実際内外ともにそのような傾向が幅を利かせ始めている。

すでにその傾向が顕著なブランクシスの状況を前にしてポイエーシスがもつ歴史の意味は、文化の一方の担い手としてなお自己例示の運動を展開して主観性の健全を証明するか、あるいはまた何らかの新たな歴史的例示によって新たな相対的総体的地平を開き新しい世界観の触媒となる、という点にあると思われる。

またあえてロゴスの役割について言えば、ロゴスを担う者は、歴史的ダイナミズムを見据えつつ、ポイエーシスとともにあるいはそれに先だつて、何らかの新たな例示として、相対化総体的論理の可能性を模索し検証すべきであると考えられる。学際化や知の再編というアカデミックな運動や制度改革の試みもまたその確たる存立の地平を見いだしてはいないように思えるからである。

* * *

今回の編集においては翻訳の項をもうけた。この翻訳は、ポーランドのグダニスク大学教授であるポーダン・デミドック氏が第四回美学学会全国大会（一九九三年十月九日）において行つた特別講演をティーチング・アシスタ

ントの沖野成紀君が訳出したものである。また卒業論文は、この四月修士課程に進学した東口豊君が芳しからざる健康状態にあつて苦闘しつつ仕上げたものである。他の論考ともども御斧正をいただければ幸いである。

一九九四年三月二日

藤田一美